

# 自然ある自然ある住まの地

## STORY

地球に宛てた手紙	1・2
身近な山に宛てた手紙	3・4
私たちの街に宛てた手紙	5・6
地域材の家づくりネット	7・8
地域材の家づくりフロー	9・10
静岡県の取り組み	11・12
県産材の利子補給制度	13・14
木でつくる健康空間	15
やさしさのポストカード	16・17
木の強さと耐久性	18
地域材の家づくりレポート	19~22

地域の木は、やさしさの所在地。

静岡版



## 地域の山に育つ木は、 やさしさを届けるために 生まれました。

日本全国、どの住まいにも番地が記され、それが人の気持ちを伝える宛先となって、いろいろな便りが届きます。同じように、もしその住まいに使われている木材が、地域の山に出生の所在地をもつものであれば、その住まいはいろんな所にやさしさを届けることができる住まい。一人でも多くの人があることを知り、共感と実行の手をつないでくれることを願って、地域の木でつくる住まいについてこれからお話したいと思います。

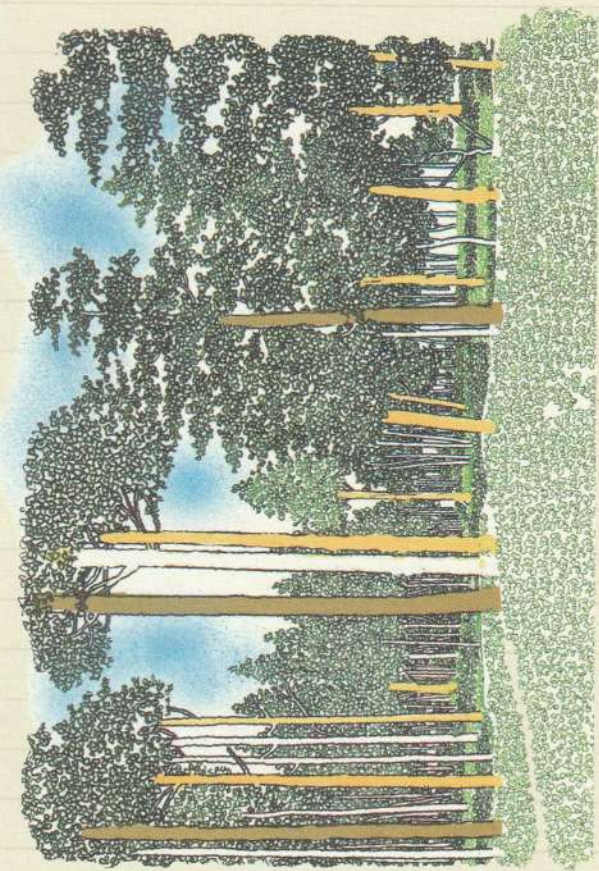
まず、最初のやさしさを届ける相手に会うために、青空をどこまでも上がり続け大気圏の外に出てみましょう。私たちの住む星の全体が見渡せる位置まで。そう、最初に書かれていたやさしさの宛名は、青く輝くこの地球なのです。



## 森林は大気のバランスを保ち、 地球を浄化する母なる資源。

地球温暖化の影響により、世界各国で発生している異常気象や海面の上昇、酸性雨。これらを引き起こす原因として炭酸ガス(CO<sub>2</sub>)やメタンガス、フロンガスの増加があげられます。とくに、炭酸ガスは排出量が膨大で、地球温暖化への影響が大きいので、その削減が重要な課題となっています。森の樹木は、葉から二酸化炭素を吸い、根から水分を吸い、太陽をエネルギー源とした光合成により、炭素を樹幹にとじこめてくれます。しかし、全ての樹木がこの吸収源となるのかというと残念ながらそうではありません。老木は炭酸ガスの吸収力が衰え、やがてその排出側に回ってしまいます。

今、私たちの身近にある山の木に目を向けてください。輸入材におされ、荒廃しつつある山もできています。炭酸ガス(CO<sub>2</sub>)の吸収源となる森林を、まず私たちの足元から見直すために、地域材を活用して、身近な山の木のスムーズな資源循環を助けなければなりません。



地域の木の住まいから



### 環境への負荷が少なく、省エネ生産できる木材。

太陽と土と水で生長する自然生成品である木材は、原木からの製材が容易で、他の建築材料と比較して格段に少ないエネルギーで生産することができます。たとえれば天然乾燥であればトムの木材を生産するのに炭素換算で30キログラムの放出ですみますが、コンクリートはその1.6倍、鋼材はその23倍、アルミニウムは290倍もの炭素エネルギーが必要となります。環境への負担を考えれば、鉄筋コンクリート造よりも木造。日本の住まいの主流である木造住宅がさらに木材の使用比率を高めれば、炭素放出量がいっそう抑制されます。



### 生物がづくりだす循環型のバイオマスエネルギー。

いくら炭酸ガス(CO<sub>2</sub>)を吸収してくれるからといっても、限られた森林資源だけに地球温暖化防止の役割を任せるのは限界があります。あわせて必要なのは炭酸ガスの放出量そのものを減らすことであり、その点で注目されているのが、バイオマスエネルギーです。これは動植物の有機物を利用するエネルギー源のことで、間伐材、腐材、木屑、植物、食品廃棄物などを、直接燃やしたり、アルコールやメタンガスなどにかえて利用します。木は燃やせば炭酸ガスを排出しますが、それは元々、木が大気中からたくさんわせたものを還元することを意味し、燃焼分に見合う植林を行えばそのバランスは保てます。



### 木材は再生可能なリサイクル資源。

埋蔵量に限りがある石油や石炭などの化石燃料に依存し続けるのではなく、地球上にある再生可能な資源を利用して環境への負担を減らそうというのが循環型社会です。紙やアルミ缶、ペットボトルなどを回収し、再利用することが私たちの暮らしの中にも根付いてきました。木は計画的に伐採、植林を行えば、永久に再生可能な循環型資源。炭酸ガスの固定化、省エネルギー化、化石燃料の低減化といったさまざまなメリットをもちます。苗木が一人前の樹木に育つまで、30年から50年という長い年月がかかると。その間、伐採された木でつくられた住まいや家具を長く大切に利用すれば、木という炭素の貯金箱を開けずじまわすことを意味します。



## 地球は青い星、そして、かけがえのない緑の星。

森林は地球の炭酸ガスの貯金箱にたとえられます。この箱が大きければ大きいほど、その吸収量も増していきます。しかし今、宇宙からこの地球を見ると熱帯に位置する途上国の緑が少なくなっているのが気になります。ここ100年足らずの間に20%も濃度が上昇した炭酸ガス(CO<sub>2</sub>)。その増加分の約3分の1は森林の減少によるものと推定されています。とくに途上国における熱帯林の伐採は、炭酸ガスの吸収源としてだけでなく、生態系も含めて地球環境に重大な影響を与えることが指摘されています。

新たな植林に必要なコストがその価格の中に反映されているとはいにくい、安価な熱帯林を輸入するのではなく、まず、私たちは身近にある地域材の良さや、それを活かすことの価値を考えていかなければなりません。もともと地球上に分布していた緑の資源。その美しいグリーンがこの星にバランス良く描かれるためにも。



発送された最初の手紙には、地球という宛先が書かれていました。

発送された最初の手紙には、

木や山からもらった、  
 たくさんのお名前。  
 それが、人と森との結びつきを  
 おしえてくれる。

鈴木、木下、山本、杉山・・・私たちの名字に「木」や「山」の字がつくものが多いのは、昔から日本人が豊かな森林の恵みに寄り添って生きてきたことの証し。地域の木でつくる住まいのやさしさの2番目の送り先は、私たちの身近にある山々です。それを届けるために、地球の中でもひとときわ緑に覆われた日本列島の、その場所へとお寄りみることにしましょう。以前、そこは「里山」という名前では呼ばれていました。

里山とは、山村の近くにあり、暮らしに結びついていた山や森のことです。昭和の中頃までは、里山の雑木林で採れた薪で風呂を焚いたり、食事の火を起こしたり、山菜を採ったり、子供たちの遊び場となったり、日々の生活になじみの深いものでした。しかし今、その里山に車で出かけてみると、レジャー施設やゴルフ場、工業団地などが出現し、すっかりとその姿を変えていることがわかります。そして、私たちの暮らしとのつながりがなくなったふるさとの山々は、今ではその存在さえすれつづつあります。



緑と光と水。  
 心に深く澄みとおる森の記憶。

しかしたとえ森と結びついた暮らしを知らない世代でも、その豊かな自然から贈られたメッセージは、今でも体のどこかに残っているはず。小学生の頃に林間学校で開いたキャンプファイヤーの夜空に立ち昇る炎、朝の森の清々しい香りや小鳥のさえずり、素足に伝わる清らかな川の水の冷たさ、それらは心に澄みとおる記憶となり、時に、山の懐かしさ、いとおしさを呼びさします。

地域の森は、治水治山、安全な空気と水の供給、川や海を育む源でもあります。しかし、そんなかけがえない森の荒廃が進んでいる地域を、各地で目にするようになりました。原因は身近な森を守り育てていくはずの地元の林業に元気がなくなり、森の管理がゆき届きにくくなっていることにあります。今こそ長い間、聞こえとしなかつた森の声に耳を傾けなければなりません。私たちの心の中に記憶として残っている大切なものを思い起こすように。

やさしさの手紙の2番目の送り先は、

### 保水機能を持つ森林は、自然を育む緑のダム。

森は水の循環をつかさどる大切な存在。森に降りそそぐ雨はすぐに川には川に流れ込まず、地中をゆくりと浸透します。そのため洪水期になっても川の水位は上がらず、緑のダムとも呼ばれる保水機能が働いています。また、地中に張り巡らされた木の根が土や石をおさえ、自然災害を防ぐ森林の土壌に浄化されたミネラル分がいっぱいのおいしい水の供給源でもあります。さらに植物や川魚、野生動物など生命の宝庫でもあり、私たちも森林浴やハイキング、キャンプなど、いこいの森をレクリエーション活動の場として利用しています。



### 海の生命を育み、都市の空気を浄化する。

森林から生まれた有機物質に富む水は、川を伝って海に流れ込み、それをプランクトンが摂取し、増殖したプランクトンが海の栄養源となり、魚介類を育むという食物連鎖があります。水源の出发点となる地域の山が荒廃していれば、地域の海の生命にも影響を与えてしまうこととなり、私たちが豊かな海の恩恵を受けなくなってしまう。また、森林は街の空気循環にも役立っており、人工物が多い都市部では太陽の反射が多く、夏には熱せられた空気の固まりができます。逆に森林は葉からの蒸発散や木々による日光の遮断により、冷たい空気を送り出し、街の熱い大気を緩和する働きがあります。



### 間伐された木材も、貴重な森林の資源。

林業では、間伐といってある程度大きく育った木を先に伐り出して森の環境整備を行います。この手入れを怠ると、森の中に日光が差し込みにくくなり、木が充分に生長することができなくなります。そして、密集した木はそれぞれが細く倒れやすくなり、雨が降ると土砂が流出する危険も増してきます。やがて一人前になる木を建材として活用することはもちろん、その前に伐り出された間伐材の使い途をしっかりと考えてあげることが、林業の支援になり、環境保護にも役立ちます。家庭の家具や学校の机や椅子、公園のベンチやアスレチック施設など、間伐材の用途を広く活用することも地域材活用の大切なテーマです。



木々の声を聞き、  
ふるさとの山を慈しむ。  
山の仕事の汗の尊さ。

林業は一代でできる仕事ではありません。地こしらえに始まり、植林、下草刈り、枝打ち、間伐と、息の長い作業を続けていき、木が生長するまで何十年とかかります。昭和の中頃には40万人以上いた林業従事者も現在では8万人近くにまで落ち込み、高齢化と後継者不足に悩まされています。林業が活力を失ってしまった大きな原因として、現在日本の木材需要の8割にまで達した輸入材の増加があげられます。小規模な林業家が多い日本では、価格面でも、供給面でも劣勢に立たされてしまっているのです。

そんな現状を改善しようと、地域の森づくりをサポートする森林ボランティアなどのグループや、後のページで紹介する地域材による住まいづくりを推進するグループが各地で誕生し、中には全国的な広がりを見せているものもあります。ふるさとの山と結びついた林業の実態を知り、地元の山の再生のために一人一人の力を加えていかなければならない時がきています。



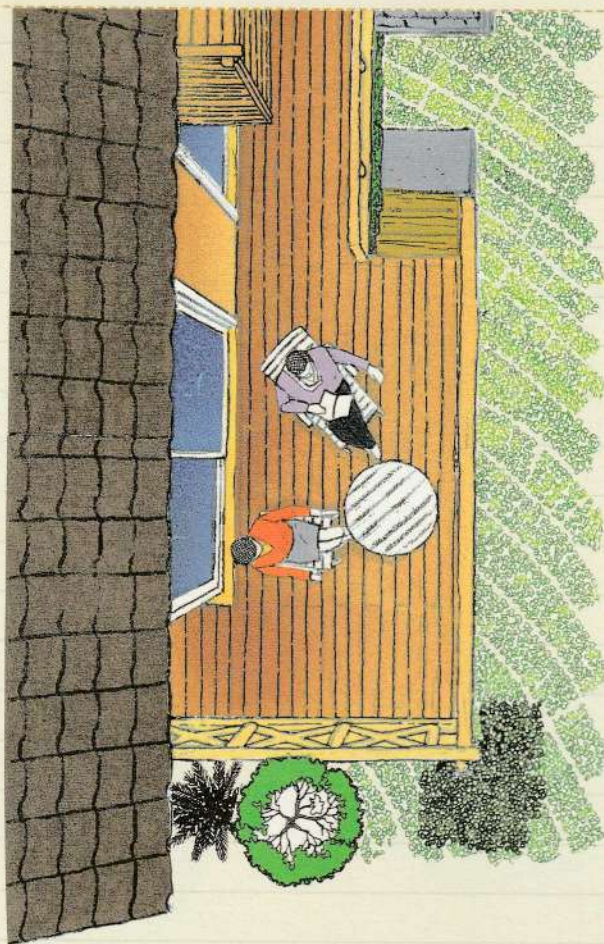
永いこと便りが途絶えていた  
ふるさとの山々。



## 住まい手から住まい手へ、 木の良さの実感を伝えて。

いろんな所へやさしさを発信できる地域材の住まい。その3番目の送り先は、まさにこれから木の住まいを建てようとしている人。それも在来の木造軸組住宅を望むけど、少し不安があるとしりこみしている人の背中を、やさしく押してあげるものです。あるアンケートによると、住まいを建てるのなら木造住宅にしたいという人が90%近くにものぼります。その中の約75%は在来軸組構法を希望しています。

外国材を主材とするアレグ住宅やツリバイフォー住宅などが着工数を伸ばしてきたことにより、昔ほどに使われなくなってしまった地域材。しかし、地元の住まいは地元の木で、というニーズに応えるために、画で量産的ではなく、個々のニーズに合わせて地域材を調達できる体制が整ってきました。地元の木を使って住まいを建てる、そんな方が増えれば増えるほど、地域材はますます身近なものになっていくことでしょう。



## 自然志向が求めているのは、 木の本質的な価値。

木の本質的な価値というものは見た目ではありません。無節、柾目といった外見や形状にこだわるのではなく、木の各部位の特質により、適材適所の木材活用を考えていくことが理にかなった住まいの建て方であるといえます。最近、若い人たちの間にも増えている自然志向の延長線に、木の住まいはあります。必ずしも優等材にこだわらず、強度や乾燥度など、木材本来の機能を備えた並材を優先して使えば、木の住まいはもと多くの人の手が届くものになるはずです。

構造材や造作材など、住まいに使われる木材をつつ吟味し、納得のゆく建て方で、地域から伐り出される木を余すところなく活用していく。そこから價格的にも魅力があり、木の良さを実感できる住まいが生まれるはずです。

住まいをつくることは、



その地域固有の材が醸し出す、味な住み心地。

一口に木で住まいを建てるといっても、本来、同じ気候風土の中で育った地域材が一番適しているはず。日本のように高温多湿の国の住まいに、湿度の低い寒冷国で育った木を使うと、腐朽に対する適応力があるかどうか不安になります。地域材は昔から、その土地の人によって経験的に材の特長が熟知され、住まいづくりに適材適所に活かされてきたもの。また、木とともに土、石灰、漆、竹、紙など、地域の自然産品も住まいづくりに巧みに活かされてきました。よく、私たちが口にする地域の名産品。食べものではなく“住みもの”にも地域産の味わいというものがあるのかもしれない。



設計や施工、材料に地域らしさがにじみ出る住まい。

地域の住まいには、本来その地域の暮らしに根ざした施工法や仕様の工夫というものがありました。たとえば雨の多い地域では軒を深く出して雨水を遠ざけたり、豪雪の地域では屋根の角度やその強度面に配慮を加えました。そして、それが地域特有の住まいの表情を生んで、魅力ある町並みややすみまいを形成してきました。しかし今、日本のどの地域に行ってみても、そんな地域固有の町並みは少なくなっており、画一的な工業化住宅が目につくのはどこか寂しい気がします。地域材で住まいをつくることで、地域固有の生活文化を見直す機会にもつながっていいですね。



日本独自の伝統構法を受け継ぐ在来軸組構法。

在来軸組構法は、わが国で永い歴史のある伝統構法を基礎とし、それに改良を加えた構法です。垂直に立てる柱と、横に渡す梁(はり)や桁(けた)など、主要な構造材である軸材を組むことから、その名が付けられました。在来軸組構法は、継ぎ手、仕口とよばれる独特の木組みの技を残しながらも、接合金具や筋交いなどで強度を補強するなど、時代とともに新しい技術が取り入れられて現在に至っています。在来軸組構法は使う材料や空間の間取りなどに柔軟性があるため、住まい手の暮らし方に合わせた注文住宅ならではの特徴を、一軒一軒にもたせることができ、変わらぬ人気を誇っています。



ネットワークで取り組む  
地域共生の新しい住まいづくり。

林業家、製材所、大工・工務店、建築士など、本来、住まいというものはその地域の専門家たちの協働の力で建てられたものでした。住まい手をその中心に置き、一人一人が任された仕事を責任をもってこなし、その知恵と技術の集大成といえるのが住まいなのです。“買う”のではなく、“建てる”住まいの復権を目指し、全国で地域材の利用促進に取り組むつくり手たちのグループが誕生しています。地域材を使って住まいを建てることは、そんな地元の住宅産業の熱意ある人々たちを勇気づけることにもなります。

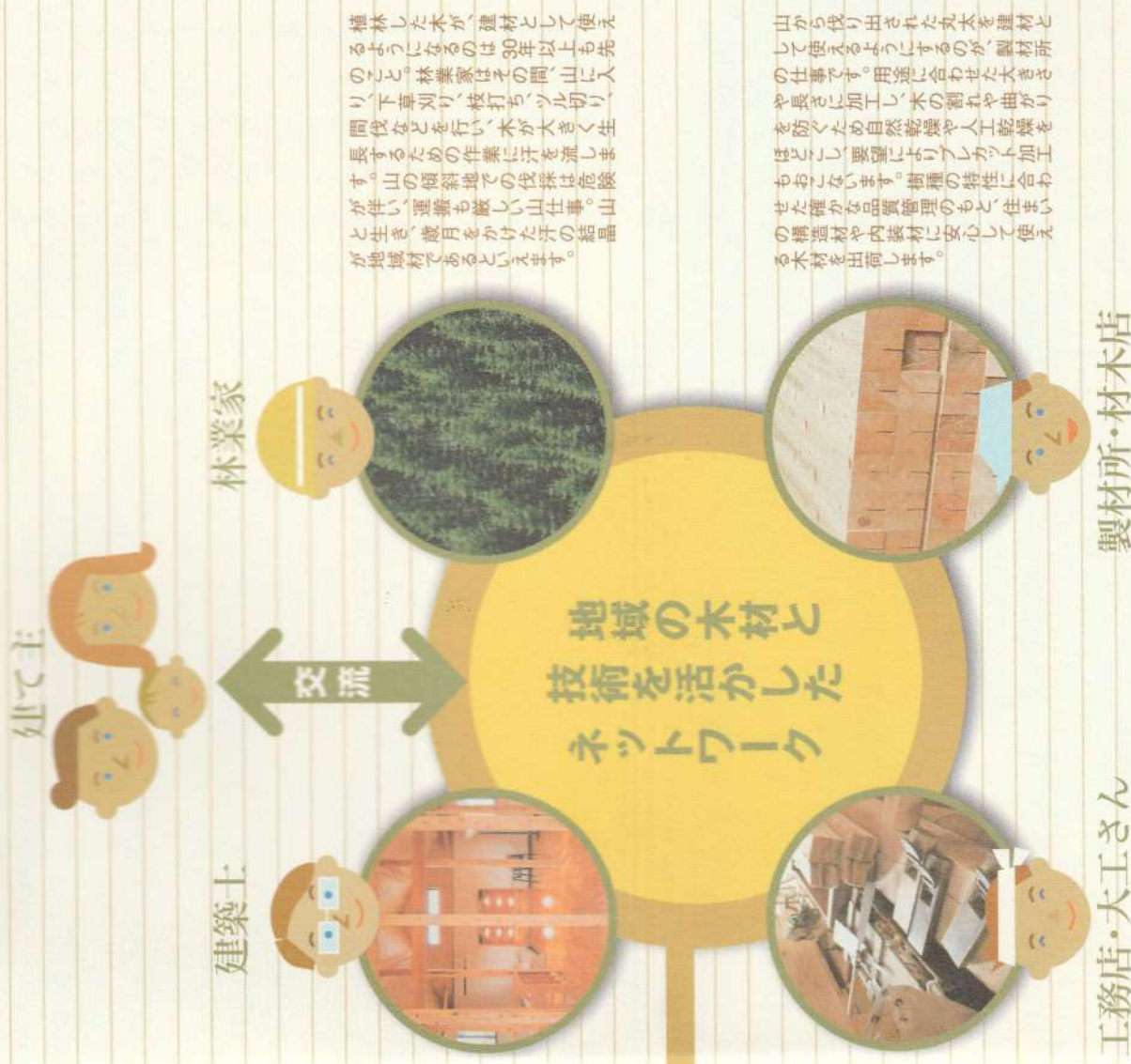
地球環境、地域の山や川、地元の住宅産業の担い手や住まい手。いろんな所にやさしさを発信できる住まいは、地域の木という所在地を持つもの。それは、その土地の陽と土と水が記された「自然番地のある住まい」であるといえるのです。



自然を、街を、人をつくる。それが三番目の手紙のしめし。

# 地域材を使って あなたの住まいをつくる そのために 地域のスペシャリストたちが 手を結びました。

建築士が主導であったり、工務店や大工さんが中心となったり、ネットワークの形態はさまざまですが、変わらないのは、住まい手を大切に、本当に喜ばれる住宅をつくるという姿勢。地域材を使った今までにない住まいづくりの流れをつくるために、自分たちのもてる知恵と技術をとことん発揮してくれる、地域の頼もしいスペシャリストグループです。



植林した木が、建材として使えるようになるのは30年以上も先のこと。林業家はその間、山に入り、下草刈り、枝打ち、ツル切り、間伐などを行い、木が大きく生長するための作業に汗を流します。山の傾斜地での伐採は危険が伴い、運搬も厳しい山仕事。山と生き、歳月をかけた汗の結晶が地域材であるといえます。

山から伐り出された丸太を建材として使えるようにするのが、製材所の仕事です。用途に合わせた大きさや長さ加工し、木の割れや曲がりを防ぐため自然乾燥や人工乾燥をほどこし、要望によりプレカット加工もおこないます。樹種の特徴に合わせた確かな品質管理のもと、住まいの構造材や内装材に安心して使える木材を出荷します。



## お互いの顔が見えるオープンな関係、 パートナーシップによる住まいづくり。

### 地域材で、住まい手参加型の家づくり。

地域材による住まいづくりが目指すのは、新しい住宅建築の提案です。住まい手の立場に立った型にはまらない自由な設計や施工。建築士や工務店、大工さん、職人さんなど、住まいづくりに参加する人たちがお互いにコミュニケーションを深めながら、住まい手も参加してみんなの力でつくりあげていく住まい。地域材を活かし、その魅力を存分に引き出すことのできる住まいをつくるには、その地域に密着したスペシャリストたちの力が欠かせませんね。

### 住むほどに味わいが深まる、ロングライフ住宅。

地域の気候風土にマッチした、確かな品質の地域材を使って建てられる住まいは、その土地にとけこみながら、永く生き続けることのできる住まいです。暮らし始めてからも、メンテナンスや必要に応じてリフォームをおこない、ライフスタイルの変化にも対応していく。身近に住まいの補修をサポートしてくれるつくり手たちのグループがいて、使われている地域材も容易に手に入る。そんな安心感もありますね。

### 家そのものにお金がかけられる住まい。

設計から使われる材料、施工法まで、自由な選択肢をもつことのできる地域材の住まいは、企画化された住宅にない夢や期待感があります。また、大手ハウスメーカーのようにモデルハウスの維持費、広告宣伝費、営業費がかからず、直接、建築の仕事にかかわる人材が多いつくり手たちのグループなら、家そのものにかかるお金の比重が高いといえます。地域材を通して、そんな本来の住まいづくりの姿が見えてきます。

### つくり手たちがいい仕事ができる誇り。

部材の規格化、工場生産、現場工事の合理化を進め、習熟した技術が必要としない住まいづくりがあります。これとは逆に、地域材の住まいは、大工さんや職人さんたちが腕をふるうことができる住まい。いくら素晴らしい設計ができて、それをカタチにできる技術がなければ、いい住まいはつくれません。家づくりへのこだわりと情熱を失わない気質をもった人たちが、存分に腕をふるえる住まいは、きとつとつくる喜びも、住まう喜びも大きいはず。

それぞれの分野で  
こだわり仕事してくれる  
職人さんたちです。

### 専門工事の仕事

基礎工事

屋根工事

板金工事

左官工事

タイル工事

電気・給排水工事

外構工事

など

設計の専門家としてオリジナルテイあふれる住まいづくりを予定ドバイスしてくれるのが建築士です。それぞれの家族のこだわりや暮らし方を反映させた個性的なプランを作成し、施工業者を手配。建築段階では現場を手ツクする工事監理も行ったりなど、設計だけでなく住宅建築をサポートしてくれます。

地域に密着して住まいづくりの実績を重ねている工務店や大工さんは、大手ハウスメーカーにはない機動力やきめ細かな対応力が魅力です。実際の建築や施工に関しては本業であり、腕のよい職人さんを抱えているところも多くあります。完成後のメンテナンスに関しても気軽に相談できますね。

# 地域材を使って、 世界にたった一つの 住まいづくり。

準備段階



まず、木を知ることから  
始めましょう。

地域づくり手たちのグループは、木の住まいを建てたいと考えている人たちに向けて、住まいづくりのセミナーや相談会、現場見学会、森林体験ツアーなど、家づくりに役立ついろいろな機会を提案しています。数か月の住まいを手がけた建築士など専門家と交流したり、実際に住宅を建てる大工さんや職人さんから生の声を聞いたり、山に入つて自分たちの家に使われる樹木にふれてみたり、そんな体験を通して、本や雑誌からでは得られない生きた知識が吸収できることでしょうか。

いろんな建築現場に  
足をはこびましょう。

その家族だけの住まい方を大切にできる地域材による家づくりは、まさに十人十色。モデルルームとして標準化して見せることができない住宅であるともいえます。そこで、欠かせないが実際の建築現場に足を運んでみる事です。つくり手のグループも構造見学会や完成住宅見学会を実施しており、それぞれの作品に込められた想いを語ってくれるはずですよ。住まいをつくることは、暮らし方をつくること。そんな大切なことがきくと見えてくるはずですよ。

家族の暮らし方が、  
住まいづくりの出発点。

住まいという舞台に描かれる日々の生活は人それぞれに違はず。まず、今までの暮らしを見つめ直し、これからどんな生活がしたいのか、住まいに何を求めるのかを、家族みんなで話し合うことが大切です。建築士など専門家のアドバイスを受けながら、自分たちの要望もしっかりと伝える。最初は思いもつかなかった、我が家流の生活スタイルが発見でき、いつそう素敵なプランになつていくことでしょうか。住まいづくりは、家族の暮らし方を確かめることでもあるのです。

限られた金額の中で  
上手な予算配分。

住宅建築費の中で木材費の割合はそれほど高くはなく、平均して30%前後です。できることなら柱や梁(はり)、土台のような住まいの主要構造材に、まずお金をかけたいもの。これらの構造材は住まいの強度や耐久性を決めるものであり、建つた後に交換するのは容易ではありません。システムキッチンやエントランス、家具などの設備は、資金に余裕ができてからグレードアップできることを頭に入れておくのもよいでしょう。

# 大工さんや職人さんとも 親しくなつて、 わが家の建築現場に 足を運ぶのが楽しみ!

建築段階



2.5ヵ月

2.5ヵ月

1ヵ月

1ヵ月

### 入居

暮らしはじめたら、住まいの手入れをしっかりとすることが大切です。もちろん建築側がアドバイスやサポートをしてくれますが、住まい手もメンテナンスの方法を知り、定期的に点検したり、自分たちでできる保守をおこなったりすることで、住まいへの愛着が深まり、長持ちさせることにつながります。

### 竣工検査

住まいが完成したら、建て主も参加して、図面通りの仕上げになっているか、施工に問題はないかを二つ手チェックしていきます。追加工事などの必要がなければ、建物の引き渡しがおこなわれます。

### 外構工事

門や塀、駐車場、造園など住まいの外まわりの工事がおこなわれます。作業によっては建物の建築と同時に進められるものもあります。

### 仕上げ工事

塗装工事や、タイル工事、板金工事など、いろんな職人さんの手で最後の仕上げがおこなわれます。いわゆる職人さんの腕の見せどころ。現場へ入る順番も決められ手際よく工事がおこなわれます。

### 造作工事

部屋の敷居(しきい)や鴨居(かもい)、押入や襖(ふすま)階段など、内部を仕上げる木工事に入ります。それぞれ空間に表情が生まれ、次第に部屋らしくなっていくます。

### 下地工事

床となる部分に根太(ねだ)などの床下地を敷き並べ、その上に畳や木などで床仕上げをおこないます。さらに給排水やガスなどの配管工事や、電気の配線工事も進められます。

### 屋根工事

骨組みができあがると、次に屋根工事に入ります。これは天候に左右されずに作業が進められるようにするため、垂木などの下地を取り付け、屋根材を敷き、仕上げていきます。

### 木工事 上棟

基礎が完成したら、その上に住まいの骨組みを組む木工事に入ります。柱を立て、梁をわたし、さらに筋交いという斜め材を壁となる部分に配置します。最後に、棟木を上げる上棟をおこない、住まいの骨組みが完成します。

### 基礎工事

地面を整地し、がらりと固め、その上に建物の基礎づくりをおこないます。基礎は直接、湿り気のある地面に接しており、さらに、住まいを支える強度が求められるので、木造建築でも鉄筋コンクリート造が主流となっています。

### 設計

住まいは、家族の夢や暮らしを育む場所。まず、新しい住まいでどんな暮らしがしたいか。自分たちのライフスタイルとは何か。それをしっかりと把握した上で、住まいの設計に移ります。家族と建築士などが一連になって検討を重ね、納得できる設計プランができたら、いよいよ建築へと進みます。



竣工検査



造作工事



下地工事



上棟



基礎工事



# 静岡の自然のやさしさが、 いっぱいいつまった 木の住まい。



同じふるさとで育ったものだから、親しみがもてる、安心感がある。

木の住まい、中でも県産材を使った住まいには、一味違う魅力があります。

しずおか優良木材供給センターは「静岡発 Made in Natural」を

テーマに、住まいの建築材にふさわしい良質な県産材をお届けして、

永く安心して暮らせる住まいづくりをサポートしています。

あなたと一緒に生まれた自然素材、しずおか優良木材を使った、

家族と環境にやさしい住まいづくりが始まりました。

「しずおか優良木材供給センター」は、  
静岡県の豊かな森林資源を活用して、  
安心と信頼の県産材を供給しています。

地球温暖化が問題となる今、その原因となる炭酸ガス(CO<sub>2</sub>)を吸収し、固定化する森林の役割が見直されています。その働きを高め、森林資源の循環をつくりだすためには、住宅への木材利用が必要です。木は住まいとなっても、炭酸ガスを固定化し続けるので、永く住み続けられる木造住宅を建てることは、環境保全にもつながります。伐採された木は「しずおか優良木材認定工場」で製品化され、確かな品質の木材となつて、地域の住まいづくりに活かされます。そして、森には新たに植林がおこなわれ、未来へつながるエコロジックな資源循環のサイクルが生まれます。



### 森林の育成と 森林の活性化

静岡県の65%は森林です。県産材を使って木の住まいをつくることで、地域の森林をよみがえらせることができ、豊かな自然環境を育むことができます。

### 認証審査会

木材の品質や性能基準を定めて、認定工場や認証製品の審査・登録をおこないます。

〈構成員〉  
学芸員  
建築士  
建築家関係者

### しずおか優良木材 供給センター

認証審査会より認定を受けた優良な木材を供給します。

〈構成員〉  
静岡県森林組合連合会  
静岡県木材協同組合連合会  
各認定工場

### 自然志向の木の住まい

シックハウス(室内空気汚染)が問題となる中で、自然素材である木材の安全性や快適性が再評価されています。建てるなら、やっぱり家族の健康を第一に考えた木の住まい。良質な県産材を活用した自然志向の住まいづくりをサポートします。

### 住宅建設資金の 助成制度

認証審査会より認証を受けた「しずおか優良木材」を住宅建設に45%以上使用すると、静岡県から民間住宅ローンの利子補給が受けられます。

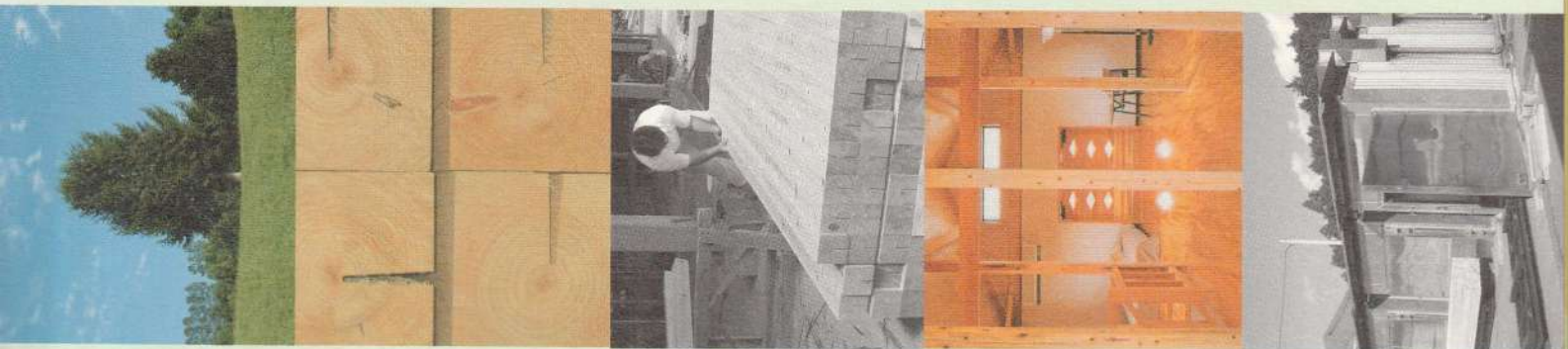
### しずおか優良木材



- 品質基準  
丸、身/なし  
曲がり/甲種0.2%以下  
乙種0.1%以下  
その他の欠点/軽微
- 寸法基準  
材辺/φ、+1.0ミリ  
材長/φ、+無制限
- 乾燥基準  
含水率20%以下
- 強度基準  
スギ/E70相当以上  
ヒノキ/E90相当以上

### 品質規格基準

# しずおか優良木材供給 センターの認定工場は、 安心できる確かな品質の 認証製品を出荷しています。



「しずおか優良木材供給センター」は、認証審査会から品質・規格基準にもとづく検査を受け、認定工場として登録された製材工場などから構成されています。各認定工場は、安心できる確かな品質の認証製品を出荷しており、県の住宅建設助成制度（利子補給）への対応もスピーディーにおこなうことができます。



静岡県個人住宅建設資金利子補給制度「静岡優良木材型」

10年間で約80万円を県がサポート。  
「しずおか優良木材」を利用すれば、  
住宅建設助成金が受けられます。

しずおか優良木材認証審査会により認証された「しずおか優良木材」を45%以上住宅建設に使用すると、静岡県から民間住宅ローンの利子補給が受けられます。

### 利子補給率

利子補給率は、民間住宅金融ローンと住宅金融公庫の災害復興融資金利の利差(2%を上限)となります。金利の変動などにより、利子補給率も変わるため、補給金額は明示できませんが、仮に民間ローン金利3.7%、住宅金融公庫の災害復興融資金利1.7%として、500万円の融資を25年支払いで返済した場合、10年間で83万1千円の利子補給がおこなわれ、10年間で83万1千円の利子補給が受けられます。

### 利子補給期間

利子補給期間は、民間住宅ローンの返済開始から10年間で、

### 利子の支払方法

利子補給は、県から金融機関に直接支払われます。金融機関は、利子補給分だけ低金利で住宅ローンを融資しますので、その分、有利なローンが受けられるわけです。

### 利子補給の対象

利子補給の対象となるのは住宅金融公庫から借り入れた上で、さらに不足する資金を借り入れた「民間住宅ローン」が対象となります。融資限度額は450万円(床面積120㎡以下)、または500万円(床面積120㎡超280㎡以下)となります(TOUKAI-0型との併用は750万円までが対象)。さらに、公庫割増融資のバリアフリー住宅工事を利用している場合は100万円、住宅建築に含ませて土地を購入する場合は210~440万円が利子補給対象額として加算されます。



Step 6

静岡県個人住宅建設資金「優良木材型」の資金交付を受けます。

Step 5

しずおか優良木材使用住宅証明書が発行されたら、静岡県個人住宅建設資金「優良木材型」を申し込んだ取扱金融機関に提出します。

Step 4

必要書類を揃えて認証審査会に、しずおか優良木材使用住宅証明申請をします。

Step 3

住宅金融公庫の借入申込みをおこない、さらに取扱金融機関に静岡県個人住宅建設資金「優良木材型」を申し込みます。

Step 2

住宅金融公庫及び静岡県個人住宅建設資金「優良木材型」を取り扱う金融機関に相談して、資金計画を立てます。

Step 1

住宅建設を依頼する大工・工務店、建築士などに静岡県個人住宅建設資金「優良木材型」を利用したいことを伝え、それに適合する設計をおこないます。

# 木でつくる健康空間、すっぴんの自然感。

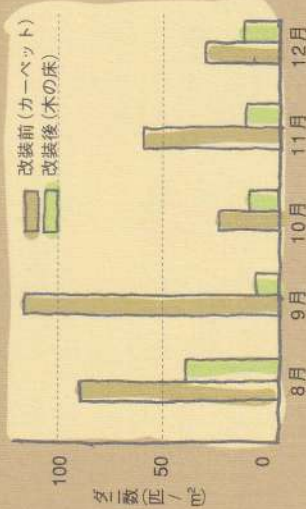
ただ見せかけを整えるために、住まいに厚いお化粧はいらない。  
木は、そのものが飾ることのない自然の美しさ、自然のやさしさ。  
心と体、その健康面から、家族にかけがえのない贈りものを届けてくれます。

## 室内の湿度を一定に保つ。

木は室内の湿度が高くなると湿気を吸収し、逆に乾燥すると、それを吐き出して、快適な室内環境をつくる調湿作用をもっています。約10cm角のスキの柱には、ビール大瓶で2.5本分もの水分が入っていて、必要に応じて内部の水分を室内に吸放出してくれます。柱ばかりでなく、床や壁や天井にも木を使えば、さらに調湿作用は高まり、夏のジメジメや冬の乾燥をやわらげ、エアコンに頼らなくても、のびやすくてくれます。

## 木の床で防ダニ対策。

カーペットを木の床にした場合のダニの数の減少



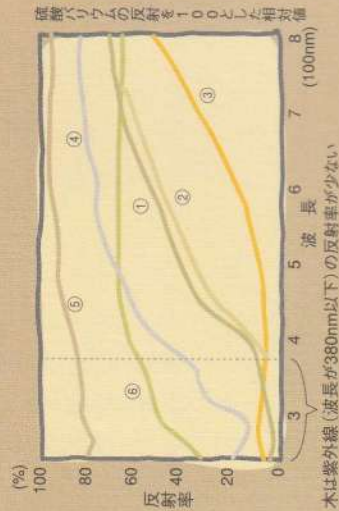
〔資料〕上村武著「木づくりの常識非常識」学芸出版社

## 熱を奪わない木の地肌。

木の床の上に寝ころんでみると思わず木の字に体を伸ばしたくなる心地よさをおぼえます。それは温もりのある木の感触のせいなのかもしれませんが。コンクリートや鉄とちがって木はなぜにやり感がないのでしょうか。それは熱の伝えやすさを示す熱伝導率に関係があります。木は熱伝導率が低いため、体がふれても体温が奪われにくいのです。そして、これに加えて清々しい木の香りや、目になじむ木目のやすらぎも木の魅力。木は人の五感に働きかけるやさしさをもっているのですね。

## 木で室内の紫外線対策。

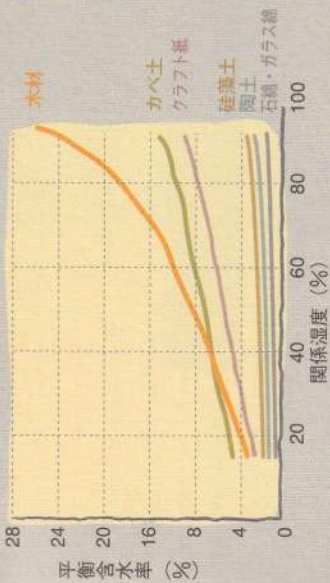
各種材料の分光反射曲線



- ① ไม้เนื้อไม้ 木製塗装無
- ② ไม้เนื้อไม้ 木製塗装有
- ③ 子午線 板目塗装無
- ④ 絹
- ⑤ 石膏
- ⑥ 大理石

木は紫外線(波長が380nm以下)の反射率が少ない

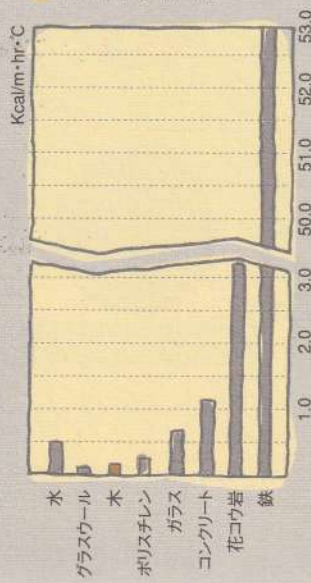
## 各種材料の平衡含水率



〔資料〕上村武著「木づくりの常識非常識」学芸出版社

住まいの気密性が高まり、エアコンの普及で冬場でも室内温度が高くなるなど、現在の住宅は家ダニが発生しやすくなっています。ダニはぜんそくやアレルギーを引き起こす原因の一つであり、増加してその症状があらわれる前に対策を考えなければなりません。とくにカーペットはダニの住みかとなる食べ物のカスなどがたまりやすく、掃除もしにくいのでダニの巣となってしまう恐れがあります。その点、木の床ならホコリやゴミを見つけやすく、取り除くこともカンタン。防ダニを考える上でも、木は理想の床材といえます。

## 各種材料の熱伝導率



〔資料〕上村武著「木づくりの常識非常識」学芸出版社

オフィスホールの破壊が進み、地上にふりそそぐ有害な紫外線の量が増加しています。外出する際に帽子や日傘、日焼け止めのクリームなどを使い、注意を払う女性も増えていますが、紫外線は窓から室内にも侵入してきます。そこで注目したいのが内装材としての木の効果。窓から入った光は壁や床に当たり室内に反射しますが、木は有害な紫外線の反射をおさえてくれる性質をもっています。その他にも、人の歩行に適した弾力性や、音楽を心地よく響かせるパランスの良い吸音性など、木にはメリットがいっぱいです。





普段は見過ごしがちですが、自然の時間(とき)は、いつも私たちの隣りに流れています。

花々の色彩、木々の息吹、小鳥たちの賛歌...

四季の移り変わりの中で、変わる事のない自然の営みは、

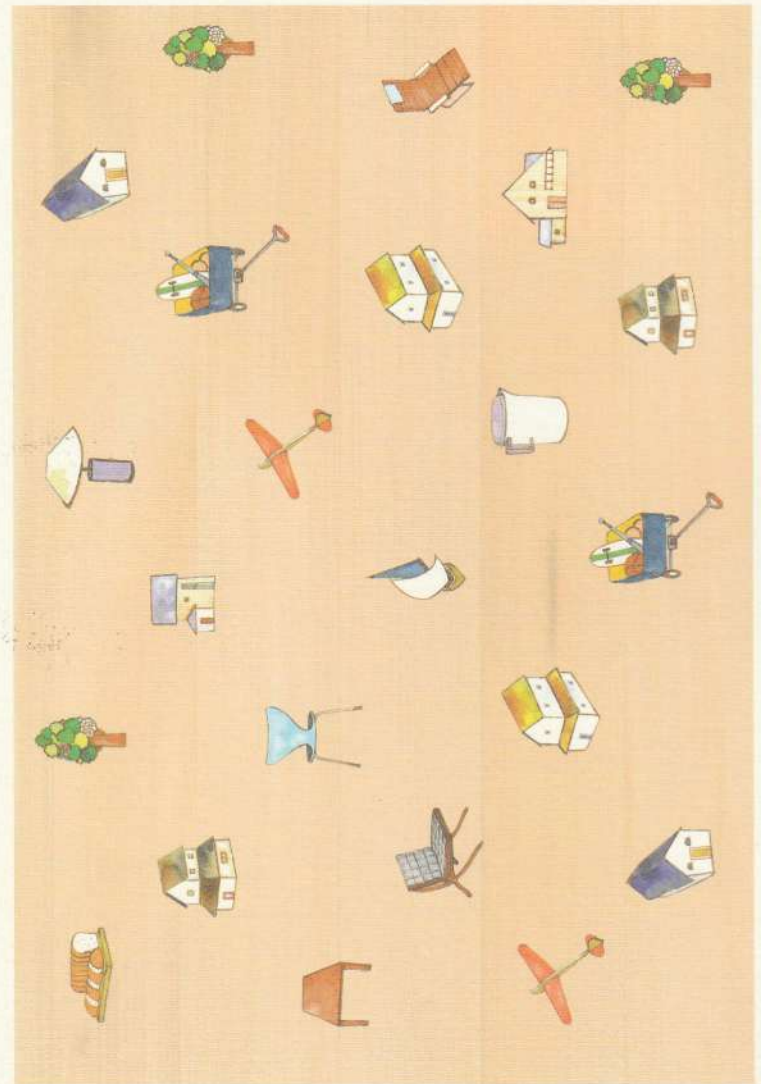
豊かな生命の設計図があることを私たちにおしえてくれます。

自然との間に線を引かないで、それと調和していく暮らし。

そこに私たちは、本当のやすらぎや人間らしさを発見できるのかも知れません。

このパンフレットを読んで、そっと澄ませた耳に届いた自然からのメッセージ。

あなたが感じた新しい気持ちの芽生えを、ぜひ誰かに伝えてください。



post card



自然番地の  
ある住まいの

post card



自然番地の  
ある住まいの



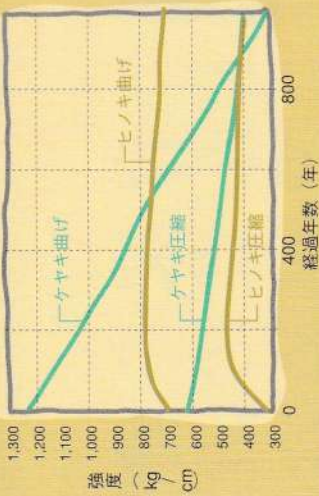
# 自然がくれた好バランス。 木の強さと耐久性。

スタンドボールをたたき込む、ホームランバッターの打球は力強いものですが、もし、木をバッターに例えるのなら、どこでも打ち返すことのできるスレージバッター。強度、耐久性、耐火性とバランスのとれた実力こそが、木の頼もしいところです。

## 経年劣化がゆるやかな木。

木の強度低下はゆるやかで、環境さえ整っていれば100年や200年という長い歳月を耐えうることできる素材です。たとえば、ヒノキは伐られてから逆に200年間は強度が増していくという自然素材ならではの生命力を秘めています。鉄やコンクリートとは比較にならないほど長寿な木。法隆寺が1300年以上経った今も、当時の木造建築の勇壮な姿をととめているのも、そこにヒノキという木材が使われ、それを活かす知恵が息づいているからこそ。法隆寺の修復にたずさわったという宮大工の棟梁は薄くカンナをかけた古材からはんりのヒノキが香り立つことも語っています。

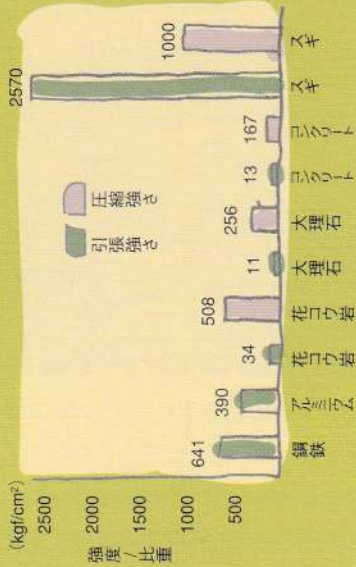
## ヒノキとケヤキの強度の経年変化の比較



〔資料〕小原一郎著「木の国の文化と木の住まい」三水社

## 鉄やコンクリートより優れた比強度。

各種材料の比強度の比較



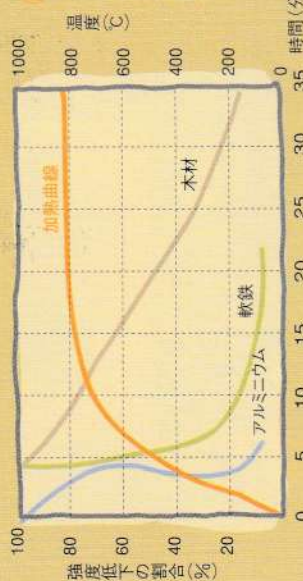
〔資料〕上村武著「木づくりの常識非常識」学芸出版社

木は自然素材。鉄やコンクリートと比べて柔軟なイメージを抱きやすいのですが、重さ当たりの材料の強度を示した比強度を見てみると、スギは鉄の4倍の引張り強度、コンクリートの6倍の圧縮強度をもつことがわかります。この数字には、「軽くて強い」という木の特性があらわれており、木は丈夫な家をつくるのが可能な素材であるといえます。たとえば地震が起きてもそのエネルギーは建物の重さに比例して大きくなるので、全体を軽くしてくれる木の住まいは地震に対してもメリットを備えています。

## 表面炭化で内部延焼をカット。

木が燃えた場合、まず表面が焦げて黒くなります。これが表面炭化といわれるもので、燃焼時にできた炭化層が酸素の供給を遮断するため、内部にまで燃え進むのに時間がかかるわけです。表面炭化は火災の際の強度低下を引き延ばす役目をはたし、5〜6分熱が加わっただけで、急激に強度が低下する鉄やアルミニウムに比べて、木は30分燃え続けたとしても24ミリ程度の炭化ですみます。とくに構造材に太い木を使った住宅は、火災が起こっても短時間で崩れ落ちる心配が少ないといえます。

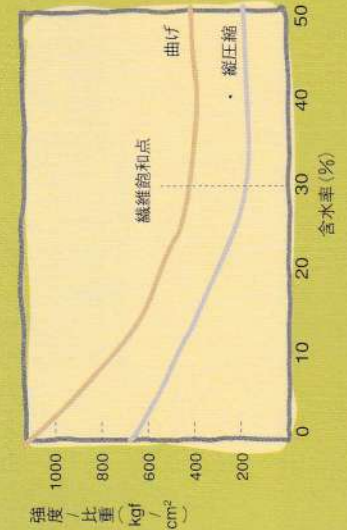
## 火災による強度低下



〔資料〕上村武著「木づくりの常識非常識」学芸出版社

## 乾燥により生まれる精度と強度。

木材の強度と含水率の関係



〔資料〕農林水産省林業技術センター「止観誌」『大きな目小さな目』

木の住まいを建てる時には、しっかりと乾燥させた木材を使うことが前提になります。木は乾燥させることにより、反りや曲がりなどの狂いを防ぐことができ、腐朽に対しても強くなります。また、木は含水率が30%未満になると急激に強度が増していき、20%に近づけば、倍近くにも強度が跳ね上がります。木は乾燥によって生まれ変わり、その本来の性能を発揮してくれるわけです。

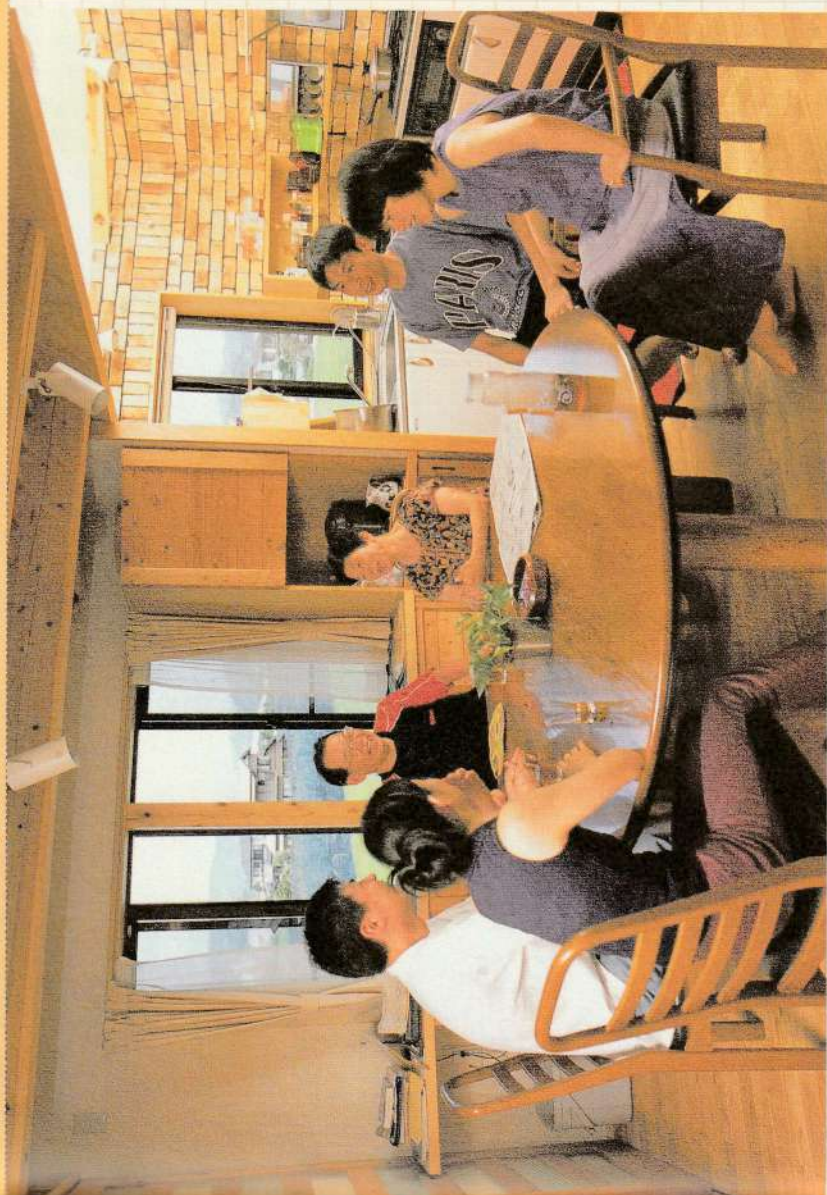
# 身近な山から届いた木。 そのぬくもりの中で、 家族がそれぞれの夢を 育んでいきたい。



木の発見、共感から家づくりが始まった山崎さん一家。  
時間をかけて、じっくりと自分たちの暮らし方を追い求め、  
完成した家は、地元、大井川流域のスギを主材料に、  
その架構をあらわしにした住まい。  
建築家の想いと家族の想いが二つに結ばれたその空間からは、  
山崎さん一家の自然体のくらし方が伝わってくるようだ。



正面が南向きになるように建物を配置した山崎邸の外観。ベランダの外装には木が使われており、手前の白壁の家屋があつ子さんの家庭料理のお店。



写真の右に長男・健史(たけし)さんと妻の聡美(さとみ)さん。中央に山崎正義(まさよし)さんとあつ子さん。左に長女の北國美香(みか)さんと夫の雅章(まさあき)さん。

## 周囲の自然や 四季の移ろいを、 暮らしの中で楽しむ ゆとり。

砂利石に敷かれた枕木を踏みながら玄関へと向かう。妻のあつ子さんが故郷、飛騨高山より移植したイチイやカエデなどが、夏の青空に緑の枝を広げ、庭に涼を添えている。玄関から室内に入ると、スギの柱や梁(はり)が、漆喰の白壁と美しい調和を見せている。この日は、ちょうど娘さん夫婦も藤沢市から遊びに来ていて、久しぶりに揃った家族の笑い声が、開放された窓から入る爽やかな風に乗って家中に響く。あらわしになった木の架構は、周囲の自然や、土地の気候に呼応するかのよう、やさしさと存在感を見せて、団らんの時間を包み込む。

静岡県藤枝市、青々とした田畑が広がり、背後に高草山、遠く南アルプスの山並みが見渡せるこの地に、山崎正義(まさよし)さん、あつ子さん夫婦が、家を立てたのは今から二年前。「以前から考えていたのですが、息子夫婦の同居が決まってふん

## でっぱりもある、 ひっこみもある、 自分たちの暮らしの 型づくり。

山崎さん夫婦が、新しい家が欲しいと思いはじめたのは今から7年前。その間、家について、自分たちの暮らし方について、じっくりと勉強できる時間をもったのが良かったと振り返る。多くの人にはモデルハウスの展示場に足を運び、何軒か建ち並ぶ中から自分たちの好みのものを安易に選択していく。中には営業マンが気に入ったからと決める人もいるという。しかし本来、世界でただひとつオンリーワンをつくり上げるはずの家づくりが、そんな短期間でできるものではないはず。既存の型に自分たちがはめられるのではなく、まず自分たちの生活の型づくりを考えたい。そのためにはどうしても時間がかかる。

最初、山崎さん夫婦も展示場に並んでいるような“びかびかの家”が、いいと思ったそう。新築の家はそういうものだという先入観もあった。しかしある機会に木の架構を自然にあらわし、木の香りやぬくもりをストレートに伝える家があることを知り、その建築現場に何度も足を運んだという。そうして、選んだのが地元の木を使って、その家族だけのオリジナルな家を手がけてくれる地元の建築会社。その親身なアドバイスを受けながら、自分たちの家づくりが動き出したのだ。



和室には、以前住んでいた家にあっただけ間（らんま）や火鉢が置かれ、生活の記憶を大切にどめられている。



階段の踏み板には可愛いフクロウが置かれて、森の中にいる気分。



キッチンの壁は煉瓦造り。自然な風合いが室内の業感をアクセントとなっている。

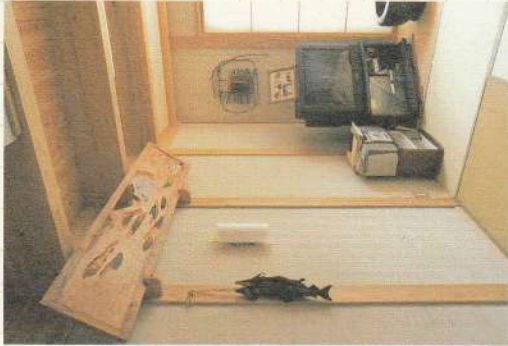
ざりがつきました」。そう話す、正義さんの一番のお気に入りのスペースが1階の8畳の和室。ここに大字に寝て天井のスギの梁（はり）を見ていると、昔の記憶がよみがえるようで落ち着く。そういつ目を細める。



正義さんがお気に入りの一階和室は、木の香りと和の趣がいっぱい。



魚の人形はあつ子さんの手作り。



壁は味のある風合いのしらす漆喰。スギの天井には穀本の梁（はり）が走り美しい構造美を見せている。



二階の木の下を歩めながら、手すり付きの階段を上がる。

ここに帰ってくると  
気持ちが落ち着く、  
そんなオープンさを  
空間に求めて。

まず、自分たちはどう暮ら  
し方がしたいのか。それをとことん  
家族で話し合い、具体的なイメ  
ジとして全員が共有する。それが  
家づくりの出発点となった。山崎  
さんが望んだのは、オープンな  
木の家。家族同士の距離が近い住  
まいだ。それは空間的な距離では  
なく、心の距離。家族同士が、訪ね  
てきたお客さんが、気がねなく自  
然にコミュニケーションを楽しむこ  
とができる。そんな空間の集合体  
が家であり、暮らしの基本である  
というわけだ。そして、この山崎邸  
には、家族の新しい夢もまたいば  
い詰まっている。1階には、幼稚園  
の先生だったあつ子さんが、ずっと  
夢見てきた家庭料理のお店があ  
る。そのために、2年間学校に通い  
ながら取得した調理師免許。「コッ  
クの経験はないけど、主婦は家庭  
料理のプロ。日本料理だけじゃなく  
て、中華料理もお出しますよ」。  
料理上手なあつ子さんのレパト  
リはたいへん広い様子。話し上手  
な夫の正義さんも店を手伝って、  
「ふたりで人生を一度楽しめたら  
いいね」と話す。

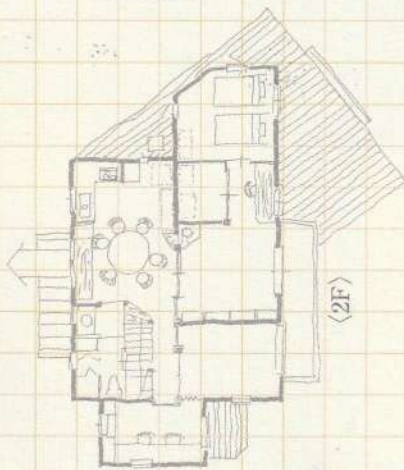
息子さんの健史(たけし)さん、  
聡美(さとみ)さん夫婦のお気に入り  
の場所は、床や天井、壁にも木  
を使つた2階の仕事部屋。ともに  
中学校の先生をしている二人は、  
自宅に仕事を持ち込むことが多い。  
「ここは、本当に集中できる場所  
ですね。カウンターみたいなこの長机  
で、私は学校の仕事を、その隣には  
子供が座って宿題をしてくれたら  
楽しいですね」。聡美さんはそうい  
って出産間近のお腹をさする。



お店の中は、民家を思わせる造作を施した  
こだわりの空間。



上部に広がるのびやかな空間には、大きな丸木が豪快な重厚感を与えている。



時とともに暮らし  
も変化する、  
それを受け止めるこ  
とのできる家。

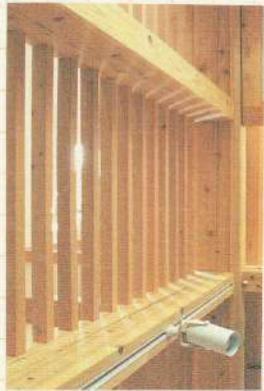
オープンなこの家を象徴する場  
所が、大きな丸テーブルが置かれ  
た2階のダイニングルームだ。スキ  
の木組みを透かして、光がらばい  
に降りそそぐ。この室内には家族が  
自然と集まり、住まいの中心とも  
なっている。この家は、設計図面上  
ではリビングルーム、寝室、書斎、子  
供部屋という割りふりがなされて  
いるが、それはあくまでも仮設定。  
新しい暮らしは今始まったばかり、  
実際の生活の中で変化していくこ  
とも当然あるし、それがこの家の  
成長であるともいえる。前の住居  
で使われていたガラスも彫刻欄間  
(らんま)も、それぞれ玄関の引き  
戸と、和室の装飾に使われ、昔住  
んでいた家の記憶を空間の中に大  
切に刻んでいる。建築中には、漆喰  
の壁塗りを手伝ったり、板塀とな  
る木を黒く塗ったり、自分たちの  
手が家づくりに参加したことも、  
住まいへの愛着をさらに深める一因  
となっている。



天井も壁も角がないアーチ状で構成された二階の寝室。漆喰の白壁と深みのある木とのコントラストが美しい。



壁面を上手に使う収納。壁面から上るロフトも収納スペースとなっている。



ダイニングの天井は、スギの木材を隙間をあけて配置。差し込む暖やかな自然光が心地よい。



大井川流域のスギを使った木の架構と、空間の連続性が開放感を生む二階のダイニングキッチン。

## 地域の気候風土に 逆らわず、 木と対話しながら 自然に生きる。

地元、大井川流域のスギを主材料にして建てられたこの家はまた、藤枝市の気候風土に合わせた配慮がその構造や仕様ゆき届いている。「夏は高温で日照時間も長いから壁よりも屋根断熱。そして軒を深くし室内を巡る風の道をつくることで、夏を涼しく過ごす知恵」。この家を使った建築会社がそう語るように、エアコンがなくてもやわらかく暑さに体がなじんでくれるのがわかる。冬場でも、上部から熱が逃げないしさらに屋根に設置したソーラーシステムが冬の寒さをしのぎやすくしてくれている。木の架構は無理なくシンプルに、そうすれば強度も保てるし、あとから手を加えるのも容易であることも、建築会社がアドバイスしてくれた。

最後にあつ子さんが話してくれたのが、今でも忘れられないこの家の木との出会い。調理学校から戻り、同じく仕事から帰宅した娘さんとたびたび出かけたこの家の建築現場。土台に二人で座って見上げれば、夜空を切り取るように木の整列な骨組みがあった。夜の冷気の中に木の香りがする。息を深く吸い込めば今日の疲れがすくと癒されていくような、木との目に見えぬ対話があった。「本当に不思議でしたが、その時、私たちの家となる木の生命(いのち)を感じました」。この家族の暮らしが、この木の住まいが、これからどのように成長していくのが楽しみです。



家族の一員である愛犬フ子も、この家が大好き。

会 静岡県木材協同組合連合会

〒420-8601 静岡市濰手町9番6号 県庁西隣8階

TEL.054-252-3168 FAX.054-251-3483

e-mail : s-mokuren@mail.wbs.ne.jp

http : //www2.wbs.ne.jp/ smokuren

※本資料の無断転載を禁じます。

本誌は再生紙を使用しております。

